

第3項 歴史的環境

洲本市は畿内と四国を結ぶ交通の要衝の1つで、古くから人々の営みが盛んな地域であった。縄文時代の遺跡としては武山遺跡^{たけやま}が周知されている。武山遺跡は洲本平野で最も古い遺跡であり、縄文時代前期から集落の営みが確認されている。

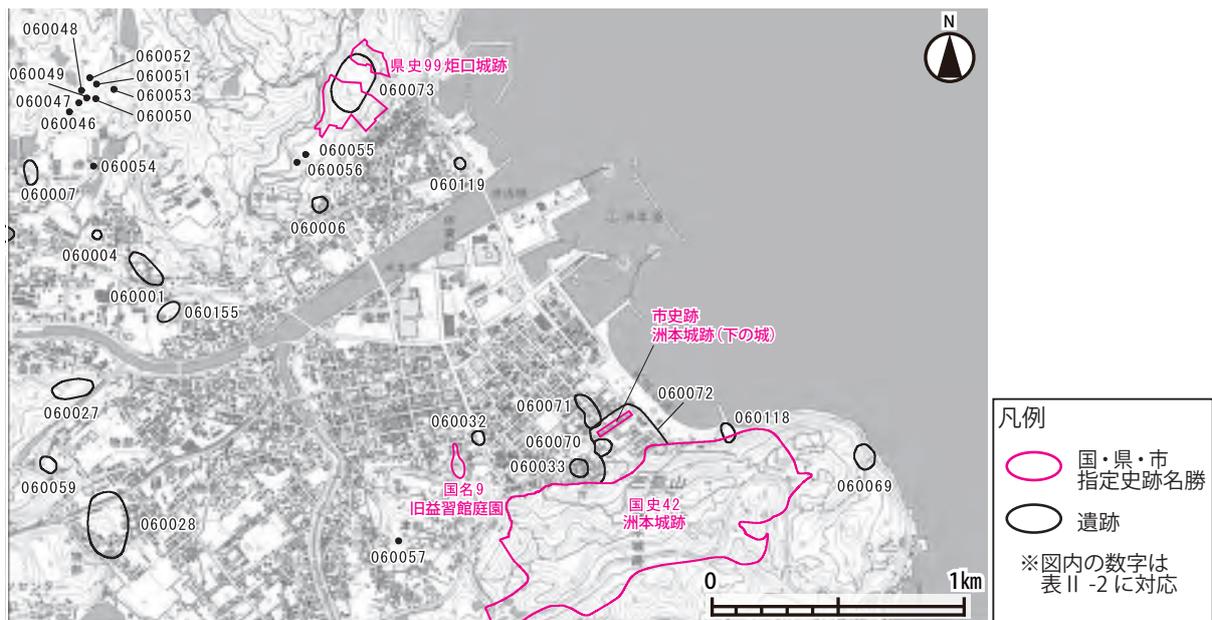
弥生時代になると、武山遺跡から洲本川を遡るように集落が広がっていく。洲本川中流域、上流域と遺跡が広がり、中流域の下内膳遺跡^{しもないぜん}（洲本市下内膳）、上流域の波毛遺跡^{はけ}（洲本市納）は洲本川左岸の扇状地上に中期後半まで拠点集落として存続する。弥生時代中期後半になると下加茂岡遺跡^{しもがもおか}など集落が丘陵上に移動し、洲本川右岸にも馬木遺跡^{うまき}などの集落が展開する。三熊山の海岸沿いの宮崎遺跡^{みやざき}では、製塩が営まれるようになる。

古墳時代に入ると、丘陵上の集落は姿を消し、洲本川中流域の下内膳遺跡に集約される。周辺には明確な前期・中期古墳は確認されていない。コヤダニ古墳からは三角縁神獣鏡が出土しており、前期まで遡る可能性が指摘されている。曲田山古墳^{みょうでんまるやま}、明田丸山古墳（洲本市千草）などは洲本川右岸側に見られる。また、洲本川下流域の三熊山北裾に旧城内遺跡^{きゆうじょうない}や山下町居屋敷遺跡^{やましたちよういやしき}などの製塩遺跡が確認される。旧城内遺跡では、古墳後期の箱式石棺も確認されており、塩作りに携わった海人族の墓と推察される。

古代では、山下町居屋敷遺跡と馬木遺跡の2遺跡が確認されている。

中世に入ると淡路島は佐々木氏、長沼氏が守護職を務め、室町時代には阿波の細川頼春^{よりはる}の弟である師氏^{もろうじ}が淡路国の守護職となったが、永正16年（1519）、淡路細川家が阿波の三好氏によって滅ぼされ、淡路の国人衆が台頭してくる。国人の中で最大の勢力を誇ったのが、淡路水軍を率いた安宅氏^{あたぎ}である。安宅氏は淡路各地に城を構え、その主な城は「安宅八家衆」の城と呼ばれた。八家衆の城である炬口城^{たけのくちじょう}や白巢城^{しらすじょう}などは現在も遺構が良好に残っており、県の史跡に指定されている。天正13年（1585）には脇坂安治が洲本城に入城し、安宅氏が築城した洲本城を総石垣の城に改修し、山裾には下の城（城館）と城下町が築かれた。

現在、上の城と呼ばれる山上の洲本城跡は国の史跡となり、山麓の洲本城跡（下の城）は市指定史跡となっている。本庭園の周辺に分布する遺跡の位置図を図II-17に示す。



図II-17 周辺の遺跡図 (S=1:30,000) (兵庫県立考古博物館 HP より 一部加筆)

表 II - 2 周辺の遺跡一覧表（兵庫県立考古博物館 HP より 一部抜粋）

遺跡番号	遺跡名	所在地	種類	時代
国名 9	旧益習館庭園	洲本市山手		
国史 42	国史跡洲本城跡	洲本市小路谷		
県史 99	県史跡炬口城跡	洲本市炬口		
060001	武山遺跡	洲本市宇山	墓・集落	縄文・弥生・古墳・平安
060004	空の谷遺跡	洲本市宇山	散布地	弥生
060006	脇遺跡	洲本市宇山	散布地	弥生
060007	下加茂岡遺跡	洲本市下加茂	集落	弥生
060027	亀谷山遺跡	洲本市物部	散布地	弥生
060028	馬木遺跡	洲本市物部	散布地	弥生・奈良
060032	居屋敷遺跡	洲本市本町	散布地	弥生
060033	山下町遺跡	洲本市山手	散布地	弥生
060046	コヤダニ古墳	洲本市下加茂	古墳	古墳
060047	下加茂岡群集墳 1 号墳	洲本市下加茂	古墳	古墳
060048	下加茂岡群集墳 2 号墳	洲本市下加茂	古墳	古墳
060049	下加茂岡群集墳 3 号墳	洲本市下加茂	古墳	古墳
060050	下加茂岡群集墳 4 号墳	洲本市下加茂	古墳	古墳
060051	下加茂岡群集墳 5 号墳	洲本市下加茂	古墳	古墳
060052	下加茂岡群集墳 6 号墳	洲本市下加茂	古墳	古墳
060053	宇山古墳	洲本市宇山	古墳	古墳
060054	下加茂岡古墳	洲本市下加茂	古墳	古墳
060055	宇山牧場古墳 1 号墳	洲本市下加茂	古墳	古墳
060056	宇山牧場古墳 2 号墳	洲本市下加茂	古墳	古墳
060057	曲田山古墳	洲本市上物部	古墳	古墳
060059	亀谷古墳	洲本市物部	古墳	古墳
060069	宮崎遺跡	洲本市小路谷	生産関連	弥生
060070	旧城内遺跡	洲本市山手	墓・生産関連	弥生・古墳
060071	山下町居屋敷遺跡	洲本市山下町	生産関連	奈良～中世
060072	洲本城跡	洲本市小路谷	城	中世～近世
060073	炬口城跡	洲本市炬口	城	中世
060118	霞台場跡	洲本市海岸通	城	近世
060119	炬口台場跡	洲本市炬口	城	近世
060155	宇山遺跡	洲本市宇山	集落	弥生・奈良～中世

表 II - 3 洲本市内の文化財一覧

国指定文化財

種別	名称	員数	指定年月日	所在地
工芸	腹巻（兜一、大袖一、小手一、曲輪一）	1 領	明治 34 年（1901）8 月 2 日	洲本市炬口二丁目
工芸	梵鐘	1 口	昭和 39 年（1964）1 月 28 日	洲本市上内膳
工芸	沃懸地螺鈿金銅装神輿	1 基	昭和 32 年（1957）2 月 19 日	洲本市五色町鳥飼中
史跡	洲本城跡	267,852.9㎡	平成 11 年（1999）1 月 14 日	洲本市小路谷
名勝	旧益習館庭園	5,396.08㎡	平成 31 年（2019）2 月 26 日	洲本市山手三丁目

県指定文化財

種別	名称	員数	指定年月日	所在地
建造物	金天閣	1 棟	昭和 59 年（1984）3 月 28 日	洲本市山手二丁目
建造物	鳥飼八幡宮本殿	1 棟	昭和 42 年（1967）3 月 31 日	洲本市五色町鳥飼中
建造物	あみだ堂の石造五重塔	1 基	昭和 42 年（1967）3 月 31 日	洲本市五色町下堺
建造物	上堺の石造五輪塔	1 基	昭和 42 年（1967）3 月 31 日	洲本市五色町上堺
建造物	浄土寺の石造宝篋印塔	1 基	昭和 42 年（1967）3 月 31 日	洲本市五色町都志
工芸	八衢神社梵鐘	1 口	昭和 46 年（1971）4 月 1 日	洲本市五色町上堺
考古	鉄塔残欠	1 基	平成 5 年（1993）3 月 26 日	洲本市山手二丁目
天然記念物	洲本奥畑のメグロチク	200㎡	昭和 45 年（1970）3 月 30 日	洲本市奥畑
天然記念物	河上神社のイブキ	1 本	平成 2 年（1990）3 月 20 日	洲本市五色町鮎原南谷
史跡	白巢城跡	119,621㎡	令和 2 年（2020）3 月 13 日	洲本市五色町鮎原三野畑
史跡	炬口城跡	24,220㎡	令和 2 年（2020）3 月 13 日	洲本市炬口

市指定文化財

種別	名称	員数	指定年月日	所在地
建造物	都志大日の石造五輪塔	1 基	昭和 62 年（1987）11 月 20 日	洲本市五色町都志大日
建造物	延長寺の石造宝篋印塔	1 基	平成 3 年（1991）12 月 25 日	洲本市五色町鮎原南谷
建造物	極楽寺の六面石幢	1 基	平成 13 年（2001）6 月 27 日	洲本市五色町鳥飼中
建造物	太子堂	1 棟	平成 29 年（2017）2 月 27 日	洲本市上内膳
工芸	石造薬師如来座像	1 軀	昭和 62 年（1987）3 月 27 日	洲本市大野
工芸	熊毛尻鞘太刀拵 刀共	1 口	平成 7 年（1995）3 月 9 日	洲本市山手二丁目
工芸	三宝院の鰐口	1 口	昭和 62 年（1987）11 月 20 日	洲本市五色町下堺
工芸	鳥飼八幡宮の懸仏	13 面	平成 15 年（2003）6 月 30 日	洲本市五色町鳥飼中
工芸	明法寺の鏡像	4 面	平成 15 年（2003）6 月 30 日	洲本市五色町鳥飼浦
工芸	境寺の菊花散凹面柄鏡	1 面	平成 18 年（2006）1 月 27 日	洲本市五色町広石下
考古	都志本村の石櫃	1 基	昭和 62 年（1987）11 月 20 日	洲本市五色町都志
古文書	広田家文書	8 点	平成元年（1989）9 月 27 日	洲本市山手一丁目
史跡	洲本城跡（下の城）	2,905㎡	昭和 58 年（1983）7 月 20 日	洲本市山手一丁目
史跡	下堺の築穴古墳	1 基	昭和 62 年（1987）11 月 20 日	洲本市五色町下堺
天然記念物	シロミノヤブムラサキ（白実の藪紫）		平成 7 年（1995）3 月 9 日	洲本市小路谷
天然記念物	鳥飼八幡宮のホルトノキの巨木	1 本	昭和 62 年（1987）11 月 20 日	洲本市五色町鳥飼中
無形民俗文化財	長林寺のつかい檀尻		平成 3 年（1991）12 月 25 日	洲本市五色町都志万歳
無形民俗文化財	鳥飼八幡宮の大綱引き		平成 3 年（1991）12 月 25 日	洲本市五色町鳥飼中
無形民俗文化財	柱松の柴燈		平成 3 年（1991）12 月 25 日	洲本市五色町鮎原栢野

国登録有形文化財

種別	名称	員数	指定年月日	所在地
建造物	榎本家（旧小川家）住宅主屋	1 棟	平成 15 年（2003）7 月 1 日	洲本市五色町鮎原上
建造物	榎本家（旧小川家）住宅長屋門	1 棟	平成 15 年（2003）7 月 1 日	洲本市五色町鮎原上
建造物	榎本家（旧小川家）住宅離れ	1 棟	平成 15 年（2003）7 月 1 日	洲本市五色町鮎原上
建造物	米田家住宅客殿	1 棟	平成 16 年（2004）3 月 2 日	洲本市宇山二丁目
建造物	米田家住宅下納屋	1 棟	平成 16 年（2004）3 月 2 日	洲本市宇山二丁目
建造物	米田家住宅主屋	1 棟	平成 16 年（2004）3 月 2 日	洲本市宇山二丁目
建造物	米田家住宅寝殿	1 棟	平成 16 年（2004）3 月 2 日	洲本市宇山二丁目
建造物	米田家住宅土蔵	1 棟	平成 16 年（2004）3 月 2 日	洲本市宇山二丁目
建造物	米田家住宅祠	1 棟	平成 16 年（2004）3 月 2 日	洲本市宇山二丁目
建造物	米田家住宅湯殿	1 棟	平成 16 年（2004）3 月 2 日	洲本市宇山二丁目
建造物	米田家住宅洋館	1 棟	平成 16 年（2004）3 月 2 日	洲本市宇山二丁目

第2節 洲本城と城下町の沿革

本節では本庭園と関連する歴史文化遺産である洲本城下町の成り立ちや武家屋敷の位置付けを城下町絵図の検証により確認し、洲本城と城下町の沿革を整理する。

第1項 洲本城の沿革

(1) 脇坂氏転封と蜂須賀氏の入植

洲本城の始まりは大永6年(1526)の安宅治興による築城である。安宅氏は戦国期に由良城や洲本城を中心として、炬口・千草・安乎・三野畑・湊・岩屋に拠点を設け、安宅八家衆と言われ、淡路一円を勢力下においた。また、阿波三好氏の畿内進出の重要拠点となり、天文18年(1549)に三好長慶の弟である冬康に安宅氏を継がせ、冬康を洲本城主とした。

天正9年(1581)に羽柴秀吉によって淡路が攻略された。当時の城主であった安宅清康は降伏し本領を安堵されたが、その後まもなく病死したため安宅氏は滅亡したと伝わる。

天正10年(1582)、淡路の有力水軍であった菅平右衛門が洲本城を占領したが、秀吉軍によって平定された。秀吉は四国長宗我部に対する備えとして、洲本城に秀吉配下の仙石秀久を配した。天正13年(1585)には仙石氏が讃岐高松城に転封となり、洲本城には脇坂安治が配置された。洲本城は総石垣の城に改修され、山裾には下の城(城館)と城下町が築かれた。慶長14年(1609)、24年間にわたり洲本城主であった脇坂安治が伊予大洲に転封となった。秀吉の大坂城を守るために築かれた洲本城は、事実上の廃城となる。

その後、淡路国は藤堂高虎の預かりとなり代官が派遣されるが、慶長15年(1610)には徳川家康の娘婿である池田輝政の所領となる。輝政は明石海峡を望む岩屋(淡路市岩屋)に城を築き、家老を派遣する。慶長18年(1613)には輝政の子忠雄が入部し、豊臣秀頼の在城する大坂城を包囲するため紀淡海峡を望む由良成山(洲本市由良)に新城を築城した。

元和元年(1615)、大坂冬の陣における木津川口の戦い、博労淵の戦いにおいて勲功を上げた蜂須賀至鎮に淡路一国が加増された。これ以後、淡路国は明治の代を迎えるまで徳島藩として蜂須賀氏の統治下に入ることとなる。

(2) 由良引けと洲本城下町の誕生

『洲本市史』(1974年)には蜂須賀側から土井利勝ら宛ての報告で、池田忠雄転封後の由良城は「城塀矢蔵ごとごとく落ち、大手門さえ開閉できない程破損していた。侍屋敷の囲いもなく、海岸の浜から直接馬で駆けつける様子で、稲田示植が入る予定の屋敷などは波打ち寄せる有様」であるほど荒廃が進んでいたことが記されている。至鎮の父 蜂須賀家政は、由良は淡路島の端にあって国の中心地としては不便であること、上下屋敷もないこと、商売人や近隣百姓も由良へは出入しにくく迷惑していることなどから、由良は淡路統治の場所として適正でないことを述べ、洲本に城を移したい旨を幕府に願い出る。

寛永7年(1630)に幕府の許可が下り、翌8年(1631)より城と町の機能を移す城下町の引越し(由良引け)が始まる。寛永12年(1635)、4年の年月を経て一応の完成をみる。

この時、三熊山山上の洲本城は不要として廃城のまま残され、桃山時代に一体的に築城された三熊山の麓の城に政庁機能を移転させた。これ以降、山上の洲本城が使われることはなかった。

洲本城の建設と同時に城下町も形成された。城下町については、脇坂時代の縦町型城下町(内町)西側の堀を隔てた西に横町型城下町(外町)が築かれ、現在もその町割りが色濃く残る洲本城下町が完成した。脇坂時代の名残がある内町には、三熊山北麓の洲本御殿を中心に稲田家向屋

敷などの上級藩士の屋敷が並ぶ。城下町中央部は町家であり、現在も商店が軒を連ねる。外町には、千草川に面した西側に寺町が形成された。また曲田山北裾の下屋敷筋には、稲田氏割長屋や稲田家臣の屋敷が並んだ。その屋敷ごとに庭園が造られ、その中で最大の規模を誇る庭園が稲田氏の別荘（西荘）の庭園、現在の旧益習館庭園である。特に曲田山北裾には、家臣の屋敷ごとに庭が造られ、下屋敷の庭園群として現在も3箇所残っている。

表II-4-1 稲田氏と洲本城下町の沿革

和暦	西歴	旧益習館の出来事	洲本城下町関連の出来事	藩主	稲田家当主
大永6年	1526		安宅治興、洲本城築城（永正7年説あり） 洲本の町が出来始める		
天文18年	1549		三好長慶の弟冬康、安宅家の養子になる		
天正9年	1581		11月 秀吉の淡路攻め		
天正10年	1582		菅平右衛門、洲本城占領 仙石秀久、5万石で洲本城主になる		
天正13年	1585		仙石秀久、讃岐に転封となる 脇坂安治、3万石で洲本城主になる 洲本に縦町型城下町が形成される		
慶長5年	1600		関ヶ原に洲本城主脇坂が出陣する		
慶長14年	1609		脇坂氏、伊予大洲に転封となる 洲本城（上の城）事実上廃城		
慶長15年	1610		池田輝政、淡路一国を拝領し、岩屋に城を築く		
慶長18年	1613		池田忠雄、岩屋から由良に城を移す		
元和元年	1615		蜂須賀至鎮に淡路一国が増加される	蜂須賀至鎮	
元和2年	1616		稲田示植、由良城代家老になる		
元和6年	1620			蜂須賀忠英	
寛永5年	1628				稲田示植
寛永8年	1631		由良引け開始、城下町の移転がはじまる		
寛永11年	1634		由良城破却命令		
寛永12年	1635	由良引け以後、稲田氏の別荘（西荘）の庭園として旧益習館庭園が作庭される	由良引け終了 洲本に横町型城下町が形成される		
寛永18年	1641		由良城破却		
正保3年	1646				稲田植次
承応元年	1652			蜂須賀光隆	稲田植栄
寛文6年	1666			蜂須賀綱通	
延宝4年	1676		銀札場設置、藩札発行		
延宝6年	1678			蜂須賀綱矩	
貞享元年	1684		塩屋橋架橋		
元禄13年	1700				稲田植幹
享保5年	1720				稲田植治
享保7年	1722				稲田植政
享保13年	1728			蜂須賀宗員	
享保20年	1735			蜂須賀宗英	
元文4年	1739			蜂須賀宗鎮	稲田植久

表 II - 4 - 2 稲田氏と洲本城下町の沿革

和暦	西歴	旧益習館の出来事	洲本城下町関連の出来事	藩主	稲田家当主
延享期	1744 ~ 1748		稲田家の私塾学問所の開設		
宝暦4年	1754			蜂須賀至央、重喜	
明和6年	1769			蜂須賀治昭	
明和7年	1770				稲田植晟
安永2年	1773				稲田植樹
安永6年	1777				稲田敏植
天明2年	1782		縄騒動（淡路の百姓一揆）		
寛政10年	1798		藩校 洲本学問所の開校		
文化8年	1811				稲田植封
文化9年	1812	頼山陽、浦上春琴が西荘を訪れる			
文化10年	1813			蜂須賀齊昌	
文政8年	1825				稲田芸植
天保14年	1843			蜂須賀齊裕	
弘化～ 嘉永年間	1844 ～ 1854	この頃、斎藤崎庵により「稲田氏西荘図」が描かれる			稲田植乗
嘉永7年	1854	稲田の学問所を下屋敷に移し「益習館」と称される	由良、岩屋に台場が築造される		
万延元年	1860				稲田植誠
文久3年	1863		炬口台場が完成する		
慶応元年	1865				稲田邦植
慶応4年	1868			蜂須賀茂昭	
明治2年	1869		秩禄処分により家禄が10分の1になる		
明治3年	1870	庚午事変により益習館が焼失	5月13日 庚午事変（稲田騒動）		
明治4年	1871		稲田家及び稲田家臣団、北海道静内へ 廃藩置県 淡路全域が名東県になる		
明治9年	1876		淡路全域が兵庫県へ編入		
明治22年	1889		大赦令 庚午事変関係者全員赦免となる		

第2項 洲本城下町の沿革

(1) 城下町の沿革

大永6年(1526)に安宅治興が洲本城を築城したことにより城下町ができ始める。その後、元和元年(1615)に蜂須賀至鎮に淡路一国が加増されるまでの間、仙石氏や脇坂氏などによって淡路島は治められた。その間、城下町がどのように変化したかをまとめる。

①安宅氏時代の城下町

安宅氏時代の洲本城下町を描いた天文年間(1532～1555)の絵図を嘉永6年(1853)に写したものをさらに明治24年(1891)に写した「天文年中淡路諏本町並図」(写)(図II-18)を見ると南東に城があり、その北東側に城下町が広がっている。城下町南は「御城山」及び「杉山」、北は「塩屋川」(現在の洲本川)、東は海に、西は絵図中央にある塩屋川に流れ込む南北に長い沼によって囲まれ防御されている。沼には橋が2本架けられ、北側の橋は「農人橋」と書かれている。

城下町には土屋敷や寺社、町家があったことが分かる。一方、杉山の山裾となる池の東は「野」と書かれており、湿地が広がっていたことが考えられる。その西側には「田」が広がっていた。海には船入と書かれ、「新波戸」、「古波戸」と書かれた港がある。また、江戸期には描かれている大浜海岸がまだ形成されておらず、塩屋川の河口には「沖ノ洲」が描かれており、砂州が未発達である状況が分かる。城下町の沼を隔てた西側は家屋や寺社も見られるが、東側のような町割りとはされず、農村が広がっていたと考えられる。



図II-18 「天文年中淡路諏本町並図」(写)(明治24年〔1891〕)個人蔵

②脇坂氏時代の城下町

天正 10 年（1582）に仙石秀久が洲本城主となるが、同 13 年（1585）には讃岐へ封転となり、代わりに脇坂安治が洲本城に入城した。

脇坂氏時代（1585～1609）に描かれた「城絵図」（天正 13 年～慶長 14 年〔1585～1609〕図Ⅱ-19）を見ると、山上に洲本城があり、その北側には城下町が形成されている。城下町は南を山、北と西は川、東は海に囲まれている。

図Ⅱ-18 と比較すると、西側の川は「天文年中淡路諏本町並図」（写）の中央部に描かれていた沼であると考えられる。川の西側には町割りがされていないことから、町は形成されていなかったことが分かる。しかしながら、山裾の池や野であった場所には侍屋敷が広がっている。一方、城下町は縦町型の町割りがされており、山麓と堀、川沿いには侍屋敷があり、その東側には町屋敷が並んでいる。安宅氏時代の城下町は山裾部と塩屋川沿いにしかなかった侍屋敷が中央の川沿いまで増加していることが分かる。



図Ⅱ-19 「城絵図」（天正 13 年〔1585〕～慶長 14 年〔1609〕）国文学研究資料館蔵（方位は北が下）

③蜂須賀氏時代初期の城下町

慶長 14 年（1609）に脇坂氏が伊予大洲に転封となったのち池田氏が淡路を治めるが、岩屋に城を移した。さらに岩屋から由良へ移り、その間洲本城は廃城となり、城下町の機能も失われた。

元和元年（1615）に蜂須賀氏が淡路一国を加増され、稲田氏が由良城代家老となる。しかし、由良は淡路統治の場所として適さないとし、洲本へ城を移した。

蜂須賀氏によって城下町が形成された後の元禄（1688～1704）から享保（1716～1736）年間の間に作成されたとされる「洲本府図」（写）（図Ⅱ-20）がある。これを見ると、堀を隔てた西側にも城下町が描かれており、内町と外町からなる城下町が形成されている。



図II - 20 「洲本府図」(写) (元禄〔1688～1704〕～享保〔1716～1736〕年間頃) 個人蔵 (方位は北が下)

城館の北側に形成された内町では侍、士、町、醫などの文字が見られ、その数から侍が最も多く居住していたことが分かる。そのほか、神社や会所、舟屋なども見られる。城付近や堀、川沿いに侍や士の屋敷があり、町人屋敷はそれらに囲まれるように配置されている。武家屋敷はブロック型の地割をしており、町家は短冊形の地割をしている。内町の街路は外町とは異なりT字路が多用されていることも特徴的である。武家屋敷の間口はほとんどが南北方向の街路に面していることが分かる。しかし短冊形を呈する町屋敷の間口は東西方向の街路に面しており、しかも主要街道に面している。また、中央の川が堀と記され、内町は山・海・堀・塩屋川で構成する総郭型に分類でき、織豊期に建設した縦町¹⁾を江戸期に主要街道沿いに町屋敷を配置して横町型²⁾として再建したものと考えられる。中堀の柵形はその時に、堅固な柵形石塁の虎口として改修されたものと推測できる。

一方、西側の外町には東側と同様に侍、士、町の文字が見られ、東側では見られなかった足軽や下代などの下級武士の文字も見られる。また、西側の川は山裾につながるよう改修されたとみられ、山・堀、北と西の川に囲まれている。西側の川沿いには寺が並び、寺町が形成されている様子がうかがえる。町割りは内町と異なり、北北西方向を主軸とし、碁盤目状の地割をしている。大手道沿いに町家を配置し、南側と北側には武家屋敷、西側には足軽屋敷(鉄砲町)と由良から移転させた寺町を配置している。元禄8年(1695)には百姓町に残っていた百姓を移転させ、その跡地を武家屋敷にしたというが、外町は横町型として寛永8年(1631)から元禄8年(1695)頃までの間に暫時武家屋敷・町家・足軽屋敷・寺を移転して整備していったものと考えられる。

1) 城の大手門に向かう大手筋が城下を貫く主要な町通となる。

2) 城の大手筋に直行する街道が主要な町通となる。

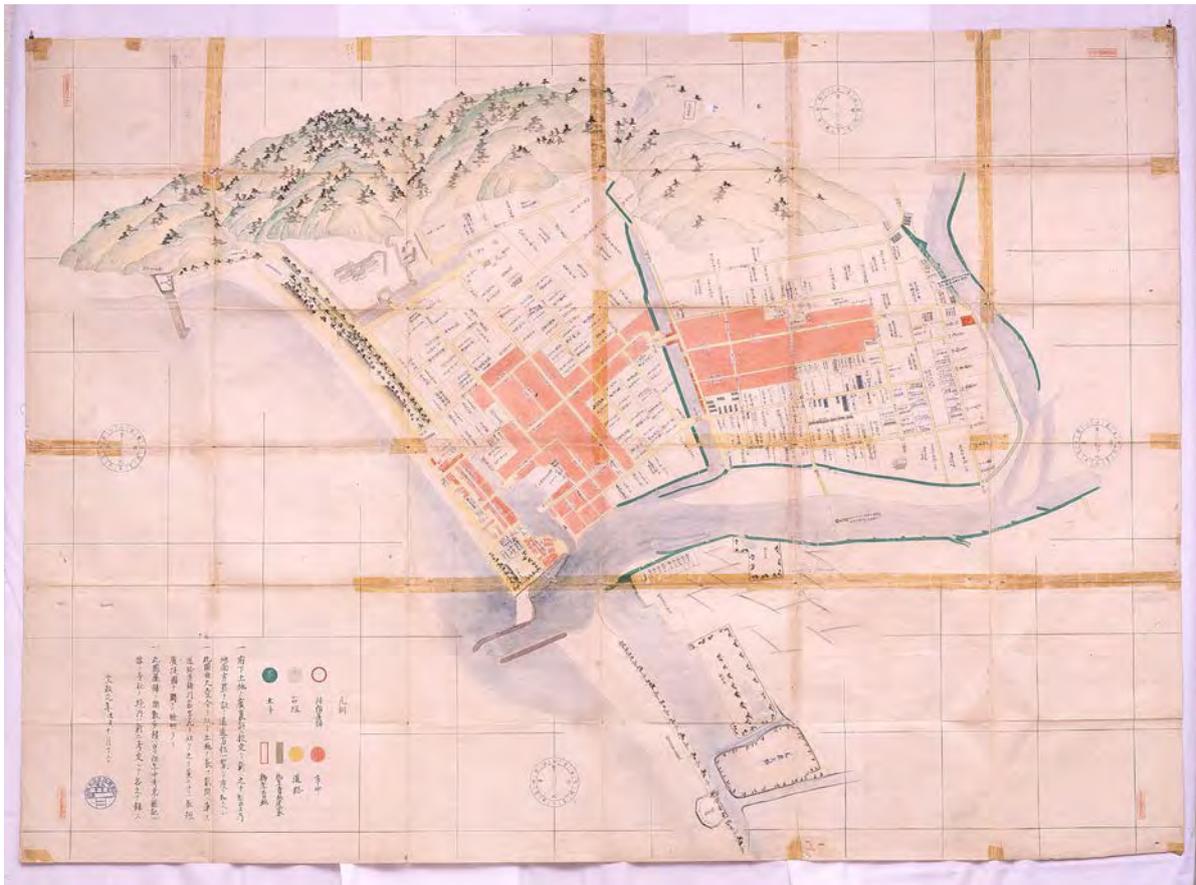
よって、蜂須賀氏の頃には主要な町人地を武家地と共に外郭内に配し、それ以外の町人地を足軽屋敷や寺社地と共に外郭の外に配した内町外町型の城下町が形成されたことが分かる。また、「侍」と「士」の表記について、後年の絵図である「洲本御城下絵図」(文政年間〔1818～1830〕頃)(図Ⅱ-21)を見ると図Ⅱ-20の「士」の位置に稲田氏の屋敷があることから、阿波藩士と稲田家及び稲田家臣を区別していることが推測される。

④文政年間(1818～1830)頃の城下町

文政元年(1818)頃に描かれた「洲本御城下絵図」(図Ⅱ-21)では元禄(1688～1704)から享保(1716～1736)年間頃の「洲本府図」(写)(図Ⅱ-20)と比較すると、やや町割りに変化はあるものの同様の城下町が見られる。

内町は内柵形虎口から北東に延びる通町と通町に直交する御門筋を大手道としている。脇坂時代の名残のある内町には洲本御殿を中心に稲田氏向屋敷などの上級藩士の屋敷が並び、城下町中央部の朱色部分は市中(町家)が見られる。また、通町と港付近にも町家を配置し、その町家を取り囲むように武家屋敷を配置している。

外町は南は曲田山、東は堀、北は塩屋川(現在の洲本川)に囲まれており、西は物部川(現在の千草川)によって外堀が構成されている。曲田山の北裾には稲田氏屋敷が並び、川沿いには寺町や武家町があり、それらに囲まれるように市中(町家)が配置されている。



図Ⅱ-21 「洲本御城下絵図」(文政元年〔1818〕頃) 淡路文化史料館蔵(方位は北が下)

⑤明治時代の城下町

明治19年(1886)の測量図(図II-22)を見ると、洲本城下町には空き地が目立つ。庚午事変により稲田氏屋敷などが消失し、稲田家並びにその家臣は北海道への移住開拓命令により洲本を去っていった。そのため、元武家屋敷のあった場所は空き地となり、町人たちが住んでいた場所に集中して住宅が建っている。



図II-22 明治19年(1886)測量区域図(部分)(方位は北が下)

以上のことから、洲本城下町は織豊期に仙石・脇坂氏によって安宅氏の戦国城下町を改修して縦町型・総郭型の城下町が建設された。その後、寛永8年(1631)の由良引け以降、蜂須賀氏によって新たに外町が横町型・総郭型の城下町として建設され、町家や武家屋敷・足軽屋敷・寺町が整備された。その際、内町は町家を中心に横町として改修された。街道を取り込んだ通町には町家を配し、物部口と中堀の榊形石塁を作り、防御を固めた¹⁾。

さらに、徳島藩直属の藩士と稲田家の家臣団とが住み分けていたことも特徴である。曲田山山麓の下屋敷には稲田家割長屋や稲田家臣の屋敷が並ぶ。特に曲田山北麓には家臣の屋敷ごとに曲田山からの流水や湧水を利用した庭園が造られた。旧益習館は外町に位置し、「改正洲府細見図」(図II-36)には「西荘」の文字が見られる。

明治37年(1904)に城下町の中央にあった中堀は埋め立てられたが、現在も洲本市街は城下町の町割りが色濃く残っており、町並みに面影を感じることができる。

(2) 城下町の庭園群

洲本城下町では本庭園以外に、現在も4箇所の庭園遺構が残っている(図II-23)。旧御殿庭園を除き、他3庭園は曲田山北裾に位置し曲田山を背景に、立地を活かした庭園である。本庭園を中心とした旧下屋敷に残る庭園群は全国的に見ても貴重な庭園群である。

①旧井上邸庭園(原則非公開)

旧下屋敷の庭園群の中では最も保存状態が良く、当時の姿を残している。巨石の自然石を巧みに活かし、そこへ石組が加えられている。園内の石組や自然石には矢穴が多くみられ、現場で庭石として加工した様子分かる。園池の中央に出島を設け、2箇所に滝石組を配し、沢飛石や岩島なども見られる。西岸には茶室が建つ。

②旧稲田氏割長屋庭園(原則非公開)

旧井上邸庭園に隣接し、「改正洲府細見図」では「割長屋」となっている。西隣とは庭園がつながっていたと考えられるが、西隣の庭園は埋められた跡が確認できる。もとは1軒の屋敷で、庭園は2分割されたと考えられる。修復され、現在は独立した庭園として観賞できる。

1) 西尾孝昌「洲本城と城下町に関する一考察」、角田誠・谷本進編『淡路洲本城』城郭談話会(1995年P39-58)を参照

③旧津田邸庭園（原則非公開）

現在、淡路信用金庫研修会館となっている。もとは稲田氏の重臣であった津田氏の屋敷跡である。研修会館の建築によって園池が北側に縮小されたが、天然石を活かした庭園である。園池中央を出島にして、2枚の切石橋が架かり、園内を回遊できる構成となっている。

④旧御殿庭園

下の城（城館）があった跡地で、裁判所の前には石垣と堀が残っており、洲本城跡（下の城）として市の史跡に指定されている。裁判所の前庭について詳細は定かでないが、旧御殿庭園の一部が残ると伝わる。曲田山を背景としない庭園である。



図 II - 23 周辺の庭園遺構位置図（都市計画図 S=1：2500 に加筆）



写真 II - 1 旧井上邸庭園



写真 II - 2 旧稲田氏割長屋庭園



写真 II - 3 旧津田邸庭園



写真 II - 4 旧御殿庭園